

クラウドイノベーションセンター

新発想でのビジネス創造にチャレンジしつつ OSS コミュニティへの積極的な貢献を始める

伊藤忠テクノソリューションズは2015年4月、クラウドを中心とする第3プラットフォームに関する技術開発やビジネス創造をリードするための社内組織「クラウドイノベーションセンター」を開設した。同センター設立の狙いは何か、また、2015年度の活動目標や具体的な取り組み内容などについて紹介する。

次世代クラウド技術開発などで CTCのビジネスを拡大

クラウドやビッグデータ、モビリティ、ソーシャルなどの要素で形成される「第3プラットフォーム」と呼ばれる情報基盤の市場が右肩上がりに成長している。

伊藤忠テクノソリューションズ（以下、CTC）が開設した「クラウドイノベーションセンター」（以下、CIC）は、成長を続ける第3プラットフォーム分野での同社のビジネス拡大を使命とする新組織である。社内の複数組織に分散していた第3プラットフォームに関連する人材を約50名結集し、次世代クラウド技術の開発や社内トレーニング、ビジネス創造、外部への貢献といった活動を主導していく計画である。

「CTCはこれまでも第3プラットフォーム分野でのビジネス展開を進めてきました。今後それをさらに拡大していくには、お客様やサービスベンダーの方たちと協業してレベニューシェアをするなどの、今までに無かった発想でのビジネス創造にチャレンジしていく必要があります。CICでは、次世代クラウド技術の開発などと同



伊藤忠テクノソリューションズ IT サービス事業グループ
クラウド・セキュリティ事業推進本部
クラウドイノベーションセンター

〔左から〕部長 亀田 積氏、課長 山本 徹氏、部長代行 小岩井 裕氏

時に、そうしたチャレンジを進めていく方針です。関係するお客様やエンドユーザーの皆様、ベンダーの皆様とのコミュニケーションが可能なエコシステムを作り、新たなビジネスモデルを模索していきたいと考えています。」（CTC IT サービス事業グループクラウド・セキュリティ事業推進本部クラウドイノベーションセンター 部長 亀田 積氏）

3つのテーマで活動を開始して プレゼンス向上を実現していく

CICの2015年度の活動テーマは、第3プラットフォームを「作る・運用する」「利用する」「広げる」の主に3つである。

「作る・運用する」というテーマでは、PaaSやIaaS関連の次世代ク

ラウド技術の開発にまず取り組む。開発する技術には、「RACK（Real Application Centric Kernel）」などがある。

RACKはクラウドネイティブアプリケーションを実現する技術である。ここで言うクラウドネイティブアプリケーションとは、自らの稼働に必要なインフラリソースを能動的に制御・確保できるアプリケーションのことである。クラウドネイティブアプリケーションを実現できれば、システム負荷に左右されず、必要なときに必要なだけのリソースをアプリケーション自身が確保できるようになる。RACKでは、OpenStackプラットフォーム上でクラウドアプリケーションを図1のようなコンセプトで実現する。「RACKの開発を始めて今年で3年

目になりました。経済産業省のソフトウェア制御型クラウドシステム技術開発プロジェクトに採択されたこともあり、徐々に性能や制御の精度が向上してきています。CICにおいても開発を継続して、実績を蓄積しながらクラウドネイティブアプリケーションの概念の普及を目指していく考えです。」(CTC IT サービス事業グループ クラウド・セキュリティ事業推進本部 クラウドイノベーションセンター 部長代行 小岩井 裕氏)

また第3プラットフォームでは、DevOps やアジャイルなどのアプリケーション開発・運用手法に対するニーズが高まると予想される。それに対応する武器としてCICが開発したのが「ADLM (Application Development Lifecycle Management)」と呼ばれるDevOps統合開発・運用環境である(図2)。

CTCのADLMは、継続的なアプリケーション開発・改善を支援するために、多数のオープンソースの開発支援ツールを統合したもの。「フルOSS構成で、開発から運用までをトータルにサポートできる統合開発・運用環境はCTCのADLMのほかには見当たりません。ベンダーロックインを回避しつつ、最新技術を利用できるのが大きな特徴です。まだ開発段階のソフトですが、2015年度には実アプリケーション開発に活用してコンセプトを確認する取り組みを進める方針です。」(CTC IT サービス事業グループ クラウド・セキュリティ事業推進本部 クラウドイノベーションセンター

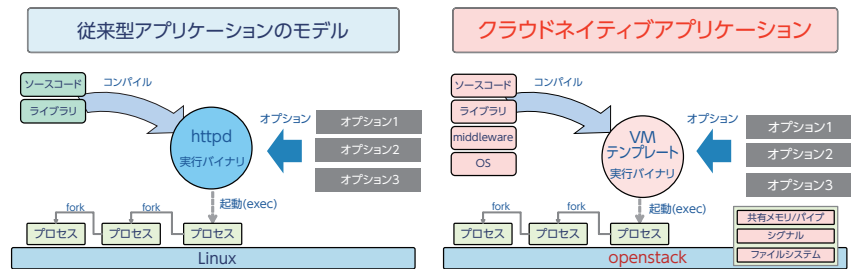


図1 CTCが考えるクラウドネイティブアプリケーションの概要

- オープンソースの開発支援ツールを統合し、継続的なアプリケーション改善を支援
- プロジェクトの進捗や品質の「見える化」を実現
- IaaSやPaaSなどの実行環境へのリリース作業を「自動化」し、作業品質を確保



図2 DevOps統合開発・運用環境「ADLM」の主な構成

課長 山本 徹氏)

活動テーマの「利用する」は、各社が提供するPaaSなどのサービスを実際に自分たちで体験すること。これを重視するのは「体験することで、サービスの癖などの実践的な知見を得られる」(亀田氏)からだ。

最後のテーマ「広げる」は、前述の2つの活動で得られた技術や知見を社内外に展開することである。例えば、開発した技術などについてはOSSコミュニティに積極的なフィードバックしていくという。「これまで当社では、OSSの活用には取り組んでいても、コミュニティへの貢献についてはあまり力を入れてきませんでした。しかし最近になって、技術やビジネストレンドの潮流をOSSコミュニティが生み出すケースが増えていきます。OSSコミュニ

ニティと一緒に活動し、そこに貢献していくことで、最先端のトレンドをキャッチアップできると共に、CTCのプレゼンス向上も実現できると考えています。」(亀田氏)

3つのテーマの活動を同時に進めるために、現在、パイロットプロジェクトとなる案件を調整中という。「実践的な知見を得るためにも、可能であれば実案件をお客様と一緒に始めたいと考えています。興味のあるお客様には、是非コンタクトをしていただきたいと思います。」(亀田氏)

CTCでは、今後2~3年までの間にCICを中心として第3プラットフォーム関連の構築事例や利用事例を多数経験し、蓄積した知見やノウハウを社内外に発信していくようとする計画である。